津市人権教育広報
あけぼの

第32号
令和４年２月16日発行
教委人権教育課
229-3253　FAX229-3017

人のぬくもりや、温かさを感じられるつながりを

皆さんはこれまで、誰かと何気ない会話をしたり思いを聞いてもらったりして気持ちが楽になったことはありませんか。

コロナ禍の２年間は、友人や知り合いと直接顔を合わせて話す機会がなくなったり、地域行事が中止となり一つのイベントをみんなでやり遂げる達成感を得る機会が減ったりしました。そのように「人」を直接感じることが少なくなったからこそ、今まで当たり前のようにあった「人とのつながり」や「人との関わり」がどれほど大切なものであったかに気付いた人もいるのではないでしょうか。

「居場所」という言葉を耳にすることがあります。居場所とは、一般的な場所を指すのではなく、「心を休めたり、安心していられたりする関係性」そのものではないかと思います。そのような関係性を生み出す人との関わりが少なくなり、困ったことを誰にも言えず、一人で抱え込んでしまうことが多くなったと感じている人もいるかもしれません。

私たちは、以前のような「人とのつながり」を再構築したり、新たな「人との関わり」を構築したりするために何を大切にしていけばよいでしょうか。

人との関わりの中で前を向くことができたり、さまざまなことに気付けたりするのは大人だけではありません。子どもたちは学校という一つの社会の中で、たくさんの人と出会うことを通して、知識だけでなく、ものの見方や考え方、感じ方も学んでいます。子どもたちは、その学びの中から「人と関わりながら生きていくことの楽しさ」を実感し、「未来を切り拓(ひら)く力」を身に付けていきます。

これらのことは、学校の中だけで感じたり、育まれたりするものではありません。家庭や地域、そしてさまざまな人との関わりの中でも育まれていきます。下を向いて歩いていた子が、地域の人に優しく声を掛けてもらって笑顔になり、自分のことを大切に思ってくれる人の存在や、人とのつながりや温かさを感じたとき、その笑顔はどんどん輝いていきます。

「人のぬくもりや、温かさを感じられる社会」にしていくために、今回のあけぼのの紹介する子どもたちの学びや考え、気付きを通して、私たち大人も一緒に考えてみませんか。

人権コラム　人と人とのつながりが感じられる社会に

全国の児童相談所が対応した児童虐待相談件数は、令和２年度、初めて20万件を超えました。また警察庁によると、令和２年に児童虐待で命を落とした子どもは61人にも上ります。

児童虐待は、家族間のストレス、経済的な問題、育児への不安など、さまざまな要因が引き金になることがあります。さらには、親自身も悩みや不安を一人で抱え込んでしまい、誰にも相談できずに孤立して困っていたり、精神的に追い詰められていたりして、何らかの支援を必要としている場合があります。こうしたことは、どこの家庭でも起こり得るもので、児童虐待の防止は社会全体で解決すべき問題です。

その背景には、育児との両立を困難にしている労働条件や労働環境をはじめ、都市化、核家族化などに伴い、社会的孤立が強まることで、これまでのような親族や地域などとのつながりの中で支え合って行ってきた育児が難しくなっていることが考えられます。

また厚生労働省は、新型コロナウイルス感染症の拡大による生活環境の変化と児童虐待との関連性についても注視していくとしています。

私たち一人一人がお互いのことを思い合い、人と人とのつながりを紡いでいくことが、安心して子育てできる社会をつくり、虐待を防止し、かけがえのない命を守ることにつながるのではないでしょうか。